資料提供
広報取材依頼

情報提供日	令和　5年　7月13日
問い合わせ先	大田市政策企画部まちづくり定住課（細田果恵）
	℡0854-83-8161（内線1265）

温泉津ブランディング「スローガン」と「ロゴ」の完成について

1．行　事　名	大田市長報告会 「湧くで温泉津」－町のスローガンとロゴの完成
2．目　　的	温泉津町民が 100 人集まり実施した会議をもとに、町のスローガンとロゴが完成したことを大田市長へ報告をすること
3．開催（実施）期間	令和　5年　7月　28日（金）
4．開催（実施）時間	9時～9時45分
5．開催（実施）場所	大田市役所2階第1会議室
6．主　　催	温泉津みらい合同会社、温泉津地区地域おこし協力隊員
7．後　　援	大田市
8．参加・入場者数	温泉津みらい合同会社2名、合同会社現象舎1名
9．行事の内容	（全体の概要、特徴的なものなど）

(1) 完成した町のスローガンとロゴの公開
(2) 町のステートメントの発表
(3) ブランドガイドラインについて報告共有
(4) 今後の温泉津の取り組み紹介

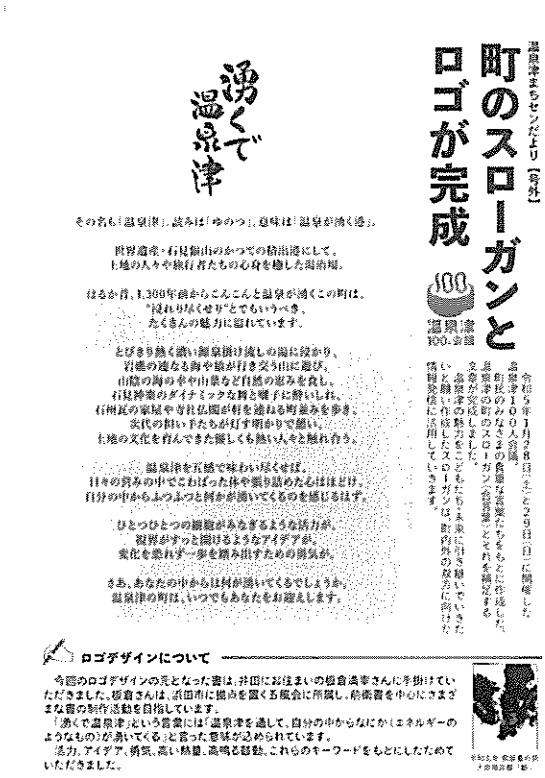
R5.1.28(土)-29(日)に開催した温泉津100人会議を経て、地域住民の言葉をもとに作成したスローガン「湧くで温泉津」とそれを補足する文章が完成しました。ゆのつの魅力を子どもたちや未来に引き継いでいきたいと願い、今後、町内外に向けた情報発信に活用していきます。

10．特記事項	・R5.6.1から温泉津地区に地域おこし協力隊員を配置。（髙田　優花さん） ・温泉津町では、町民が主体となりまちづくりを経年計画で行う。 ・温泉津100人会議の「温泉津の魅力の棚卸し」のほか、町民自身が関わって地域をよくしていこうとする「シビックプライドの醸成」になるよう取り組む。
11．その他	添付資料参照

【別添資料】

①7 月 8 日に開催した温泉津ノスタルヂックビアガーデンなどでの「#湧くで温泉津」ハッシュタグ活用の様子

②温泉津町セン便りでの発出（7 月 20 日予定）



温泉津まちセンだより【号外】

町のスローガンとロゴが完成

令和5年1月28日(土)と29日(日)に開催した温泉津100人会議。町民のみなさまの食堂や温泉たちもともに作成した、支部が完成しました。温泉津の魅力をこどもたちも含めたいと温泉津の町のスローガン「合言葉」とそれを補足する情報発信に活用していきます。

湧くで温泉津

その名も「温泉津」、読みは「ゆのつ」、意味は「温泉が湧く港」。

世界遺産・石見銀山のかつての積出港にして、
土地の人々や旅行者たちの心身を癒した湯治場。

はるか昔、1,300年前からこんこんと温泉が湧くこの町は、
"浸れり尽くせり"とでもいうべき、
たくさんの魅力に溢れています。

とびきり熱く濃い温泉掛け流しの湯に浸かり、
岩礁の連なる海や磯が行き交う出に遊び、
山陰の海の幸や山菜など自然の恵みを食し、
石見神楽のダイナミックな舞と囃子に酔いしれ、
石州瓦の家屋や寺社仏閣が軒を連ねる町並みを歩き、
次代の担い手たちが打す明かりで踊い、
土地の文化を育んできた優しくも熱い人々と触れ合う。

温泉津を五感で味わい尽くせば、
日々の営みの中でこわばった体や張り詰めた心はほどけ、
自分の中からふつふつと何かが湧いてくるのを感じるはず。

ひとつひとつの細胞がみなぎるような活力が、
視界がすっと開けるようなアイデアが、
変化を恐れず一歩を踏み出すための勇気が。

さあ、あなたの中からは何が湧いてくるでしょうか。
温泉津の町は、いつでもあなたをお迎えします。

ロゴデザインについて

今回のロゴデザインの元となった書は、井田にお住まいの板倉満幸さんに手掛けていただきました。板倉さんは、浜田市に拠点を置く五風会に所属し、前衛書を中心にさまざまな書の制作活動を自粛しています。
「湧くで温泉津」という言葉には「温泉津を通して、自分の中からなにか(エネルギーのようなもの)が湧いてくる」と言った意味が込められています。
活力、アイデア、勇気、高い熱量、高鳴る鼓動、これらのキーワードをもとにしたためていただきました。

※制作者 板倉満幸氏
（井田地区在住）

温泉津の魅力の再確認 その背景にあるものは

2020年から始まった終息コロナウイルス感染症の流行。
不断でうつる変化が起こりうる時代になった一方、新たな生活様式が増え、日本のさまざまな地域の魅力が再認識されるようになりました。

そうした中、人々の関心が地方に集まるなか、温泉津には昭和5年11月2日に制定された町民憲章を基礎に、温泉津を語るための共通の合言葉のようなものはありませんでした。

町外に羽ばたく子どもたちが、町のことを聞かれたとき、誇りを持って生きる場所を探しているような、輝ける町のことを伝えるとき、「温泉津って、こんな町なんだよ」と語れる言葉がほしい。

宿命はどこにいっても山・海・川ばかりだなんておそらくそれは通っていて、それぞれに個性を持った本当は語りたくなる魅力に富んでいるはずです。

そうしたことから温泉津100人会議を開催し、温泉津町全域から町民のみなさまにお集まりいただき、温泉津のいいところ、温泉津でやってみたいことの声を集め、整理しまとめて「温泉津の今」をこれからを表現できる町のスローガンの合言葉を作りました。

温泉津のブランドを町のみんなで導き出す

素晴らしい泉質の高温泉を有する町であることは言わずもがな、山と海の自然の恵み、神楽、歴史、人々の熱さに触れることで、生きる活力やアイデア、一歩を踏み出す勇気が湧いてくる町であることを改めて実感しました。

「なにか自分もやってみようと、いろいろと行動が湧き出すような、チャレンジと可能性に満ちた町」温泉津町民による100人会議で集まったたくさんの言葉たちすべてがここに表現されています。

こうした地域の価値を整理し、言語化していくことも地域ブランディングと言います。企業の商品やサービスと違い、地域のことだからこそ、視点で検討し取り組むことが大切と考えて、導き出しました。

表現・制作者
（たかだ ゆうきさん）

はじめまして、令和5年度 温泉津の地域おこし協力隊です。

表現・制作者（たかだ ゆうきさん）

表現・制作者（たかだ ゆうきさん）

表現・制作者（たかだ ゆうきさん）

これからのこと

令和5年5月6日以降、新型コロナウイルス感染症の感染症法上の位置づけが5類感染症に移行したことを受け、人の移動がこれまでとは違う形で戻ってきています。

かつて個の情報発信として栄えていた時代、昔から温泉津の交流で栄えました町民の西廻り航路は、今の温泉津にも繋がっているような気がしています。

温泉津100人会議は、今初りの温泉津の記録、温泉津は、町の個性を大切にしながら、内と外がかけはしとなる未来へ向けたチャレンジを受け入れ応援していきます。

今後、このスローガン/合言葉には、ポスターなどを通じて町内外へ向けた広報活動に活用していきます。

③温泉津めぐり（ウェブサイト）での公開

温泉津まちセンだより【号外】

町のスローガンとロゴが完成

温泉津100人会議

令和5年1月28日(土)と29日(日)に開催した温泉津100人会議。町民のみなさまの貴重な言葉たちをもとに作成した、温泉津の町のスローガン(合言葉)とそれを補足する文章が完成しました。

温泉津の魅力をこどもたち・未来に引き継いでいきたいと願い作成したスローガンは、町内外の双方に向けた情報発信に活用していきます。

湧くで温泉津

その名も「温泉津」。読みは「ゆのつ」。意味は「温泉が湧く港」。

世界遺産・石見銀山のかつての積出港にして、
土地の人々や旅行者たちの心身を癒した湯治場。

はるか昔、1,300年前からこんこんと温泉が湧くこの町は、
“浸れり尽くせり”とでもいうべき、
たくさんの魅力に溢れています。

とびきり熱く濃い源泉掛け流しの湯に浸かり、
岩礁の連なる海や猿が行き交う山に遊び、
山陰の海の幸や山菜など自然の恵みを食し、
石見神楽のダイナミックな舞と囃子に酔いしれ、
石州瓦の家屋や寺社仏閣が軒を連ねる町並みを歩き、
次代の担い手たちが灯す明かりで憩い、
土地の文化を育んできた優しくも熱い人々と触れ合う。

温泉津を五感で味わい尽くせば、
日々の営みの中でこわばった体や張り詰めた心はほどけ、
自分の中からふつふつと何かが湧いてくるのを感じるはず。

ひとつひとつの細胞がみなぎるような活力が。
視界がすっと開けるようなアイデアが。
変化を恐れず一歩を踏み出すための勇気が。

さあ、あなたの中からは何が湧いてくるでしょうか。
温泉津の町は、いつでもあなたをお迎えします。

ロゴデザインについて

今回のロゴデザインの元となった書は、井田にお住まいの板倉満幸さんに手掛けていただきました。板倉さんは、浜田市に拠点を置く五風会に所属し、前衛書を中心にさまざまな書の制作活動を目指しています。

「湧くで温泉津」という言葉には「温泉津を通して、自分の中からなにか(エネルギーのようなもの)が湧いてくる」と言った意味が込められています。

活力、アイデア、勇気、高い熱量、高鳴る鼓動。これらのキーワードをもとにしたためていただきました。

令和五年 県展書の部
大田地区展「断」

温泉津の魅力の再確認その背景にあるものは

２０２０年から始まった新型コロナウイルス感染症の流行。

予測できない変化が起こりうる時代になった一方、新たな生き方の選択肢が増え、日本のさまざまな地域の価値が再認識されるようになりました。

そうした注目が地方に集まるなか、温泉津には昭和５９年１１月２日に制定された町民憲章を最後に、温泉津を語るための共通の合言葉のようなものはありませんでした。

町外に羽ばたく子どもたちが、町のことを誰かに教えるとき、新しく生きる場所を探しているような、旅する誰かに町のことを伝えるとき、「温泉津って、こんな町なんだよ。」と語れる言葉がほしい。

田舎はどこにいっても山・海・川ばかりだなんて言いますが、本当にそうでしょうか？おそらくそれは違っていて、それぞれに個性を持った、本当は語りたくなる魅力に富んでいるはずです。

そうしたことから温泉津１００人会議を開催し、温泉津町全域から町民のみなさまにお集まりいただき「温泉津のいいところ」と「温泉津でやってみたいこと」の声を集め、整理しまとめ上げ、温泉津の今とこれからを表現できる町のスローガン（合言葉）を作りました。

温泉津のブランドを町のみんなで導き出す

「湧くで温泉津」

素晴らしい泉質の高温泉を有する町であることは言わずもがな、山と海の自然の恵み、神楽、歴史、人々の熱さに触れることで、生きる活力やアイデア、一歩を踏み出す勇気が湧いてくる町であることを表現しました。

「なにか自分もやってみよう」という思いと行動が湧き出すような、チャレンジと可能性に満ちた町。温泉津町民による１００人会議で集まったたくさんの言葉たちすべてがここに表現されています。

こうした地域の価値を整理し、言語化していくことを地域ブランディングと言います。企業の商品やサービスと違い、地域のことだからこそ地域で検討し取り組むことが大切と考え、導き出しました。

これからのこと

令和５年５月８日以降、新型コロナウイルス感染症の感染症法上の位置づけが５類感染症に移行したことを受け、人の移動がこれまでとは違う形で戻ってきています。

かつて銀の積出港として栄えていた時代、港を拠点に人やモノの交流で栄えました。昔から温泉津の本質は自由都市。そのころの町民の自由な気風は、今の温泉津にも繋がっているような気がしています。

温泉津１００人会議は、令和５年の温泉津の記録。温泉津は、町の個性を大切にしながら、内と外からはじまる未来へ向けたチャレンジを受け入れ応援していきます。

今後、このスローガン（合言葉）は、ポスターなどを通じて町内外へ向けた広報活動に活用していきます。

はじめまして。
令和５年度 温泉津の地域おこし協力隊です。

髙田 優花
（たかだ・ゆうか）

東京のほうから参りました、髙田優花と申します。

「あれ、西田さんじゃないの？」と思われた顔見知りの方も多くおられるかと思いますが、実は旧姓が西田、婚姻後の姓は髙田と申します。（ややこしくしてすみません）

私は2018年、前職の関係で石州和紙のリサーチをしており、足繁く島根は三隅町に通っておりました。
温泉津のことはかねてから「とんでもない秘湯がある」と聞いており、三隅から帰る途中に一度入湯したが最後、二度と忘れぬ名湯として記憶に刷り込まれました。石州和紙の業務を終えてからも、個人的に通うようになり、少しずつ、それでも確実に温泉津に心を惹かれ、こうして地域おこし協力隊として関わりを持つことになりました。
この100人会議を始めとする「温泉津ブランディング」を通して、世界中に私のような温泉津のコアなファンがいる、そんな町になったらなあと考えています。

神楽が好きで、温泉津舞子連中にも所属させていただいております。
未だ勉強中の身ではございますが、どうぞよろしくお願い申し上げます。